

を除き、安来市高広遺跡IV区1号横穴墓²の玄門部から羨道部にかけて側壁が火を受けた痕跡がある例や、安来市岩屋口北遺跡12号横穴墓³の閉塞石が焼けて赤変している例等が挙げられるが、玄室内で火を焚いた例は管見では知られていない。

横穴式石室では、兵庫県神戸市高塚山古墳群8号墳⁴で、玄室・前室・羨道部の4箇所・5人以上が火葬されている例のほか、奈良県下でも石室が焼けていた例が知られている。

このように全国的に見て極めて希な例であることや、今回の調査結果からも埋葬儀礼等の復元は困難である。松江市屋形1号墳⁵等の横穴式木室等含め、火葬が全国的に普及する前に火を使ってどのような埋葬儀礼を執り行つたのか、現時点では不明であり将来の資料の増加を待ちたい。

第3節 安来市中海東岸部の横穴墓について

安来市黒井田町・島田町の中海海岸部横穴墓の様相は、これまでに当横穴墓群のほか浜小崎古墳群⁶や小汐手横穴墓群⁷等合計30基が発掘調査されており、次第に明らかになりつつある。

その多くは中海に突きだした丘陵斜面に築かれており、横穴墓へのアクセスは尾根伝いよりも海上より舟で行き来したと考えられるような立地のものが多い。

築造時期は、大谷編年出雲3期が14基、出雲4期が6基である。この内、出雲3期の横穴墓は小汐手横穴墓群からのみ検出されている。

この海岸部の横穴墓と平野内陸部の横穴墓の様相を比較すると、以下の点で様相が異なる。

①出雲3期の玄室形態は、内陸部はドーム形が多いのに対し、海岸部はドーム形とともに妻入テント系が多い。

②出雲4期の内陸部の横穴墓は羨道のある意字型となっているものが多いのに対し、現状では海岸部は意字型になっている横穴墓は1つもない。

その他にも当地域の横穴墓から出土する須恵器のうち、出雲地域から普遍的に出土するものと異なる形態・技法のものが多く出土するなどの点が挙げられる。

こうした違いが、どのような意味を持つのか現時点では明らかにすることが出来ず、ここでは問題の所在を指摘するのに止めたい。

註

1. 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
2. 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』和田団地造成工事に伴う発掘調査 1984
3. 島根県教育委員会『岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡(F区)』一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13 1997
4. 神戸市教育委員会『高塚山古墳群発掘調査概要』1994
5. 「口絵 特異な石室」『季刊考古学』第45号特集横穴式石室の世界 雄山閣出版社 1993
6. 島根県教育委員会『福富I遺跡・屋形1号墳』一般国道9号(松江道路西地区)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2 1997
7. 安来市教育委員会『浦ヶ部遺跡群発掘調査報告書』1994
8. 安来市教育委員会、1998年調査。